

## 2021年8月2日 拡大園内研修 午前の部 「遊びになるということ」

学び続けるコミュニティを広げるべく、

教職大学院生である高校・中学校の先生方や他園の先生方と

協働して「遊び」について探究しました。

世界中で幼稚教育の価値が見直されているのは日本でも同じだった！

「遊び」とは何か、「遊びになる」とはどういうことなのか、

「帯紙」という対象と向き合う中で、

次第に「遊びになる」ことの体感を言語化していく学校教師と、

どうみどりどう援助したのかを言語化する幼稚園教師が、

異質な他者として対話し、互いの教育観や子供観の違いを実感しながら

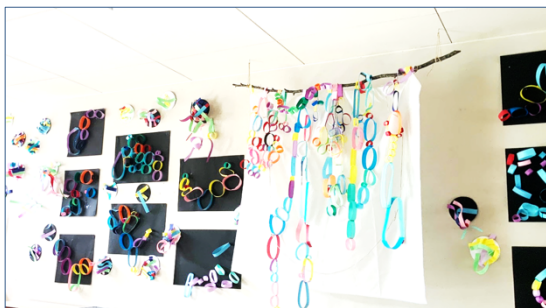
「遊びになるということ」について探究を深めました。

「遊ばされる」のではなく「遊びになる」ということは

「学ばされる」のではなく「学ぶ」のであるということにつながり、

そこには場を作り、学びを支える者としての教師の役割があるということ

を新たな研修スタイルの中で各々が実感していきました。



### 「遊ばされる」と「遊ぶ」

—環境を自分のものにする



帯紙を使って球体を作りたいという思いをもち没頭したKさん。話し合いでは「試行錯誤することが遊びの楽しさになっていた。」と話題になった。どうすればよいかを一緒に考えた教師に対しては「援助は嬉しいが、答えは自分で見つけたい。」と言葉にした。子供自身が素材を選び、試すことができる環境、寄り添う教師の援助の在り方について対話を通して深めた。



一緒に「遊ぼう」とする援助側の存在が自分の行為を保障してもらっている安心感につながったというEさん。援助側の教材の提供によって作りたいもののイメージが変わっていったものの、戸惑いから面白さへと心情の変化を感じたというMさん。「遊び」は人と人の協働によって織りなされるものであることを感じた。



「帯紙で何を作ったらいいの？」と悩んでいる様子のOさん。援助側は様子を伺いつつ、「何かを作り出す」という思考から、「帯紙って面白い」と気付けるように、ちぎったり細くしたりして触れ合いの方法を提示した。手掛かりをもらったことで、気持ちもほぐれ、イメージが湧いてきたという振り返りがあった。

まずは帯紙との対話。帯紙はどうしてほしいのか、折って握ってその素材に「身体性を帯びさせる」ことが「遊び」だったという捉えのKさん。幼稚園教師と高校教師の捉える「遊び」概念の違いが面白く、その後の対話の深まりを生んだ。捉え方が違うからこそ、それぞれの当たり前を問い直す機会となった。

